

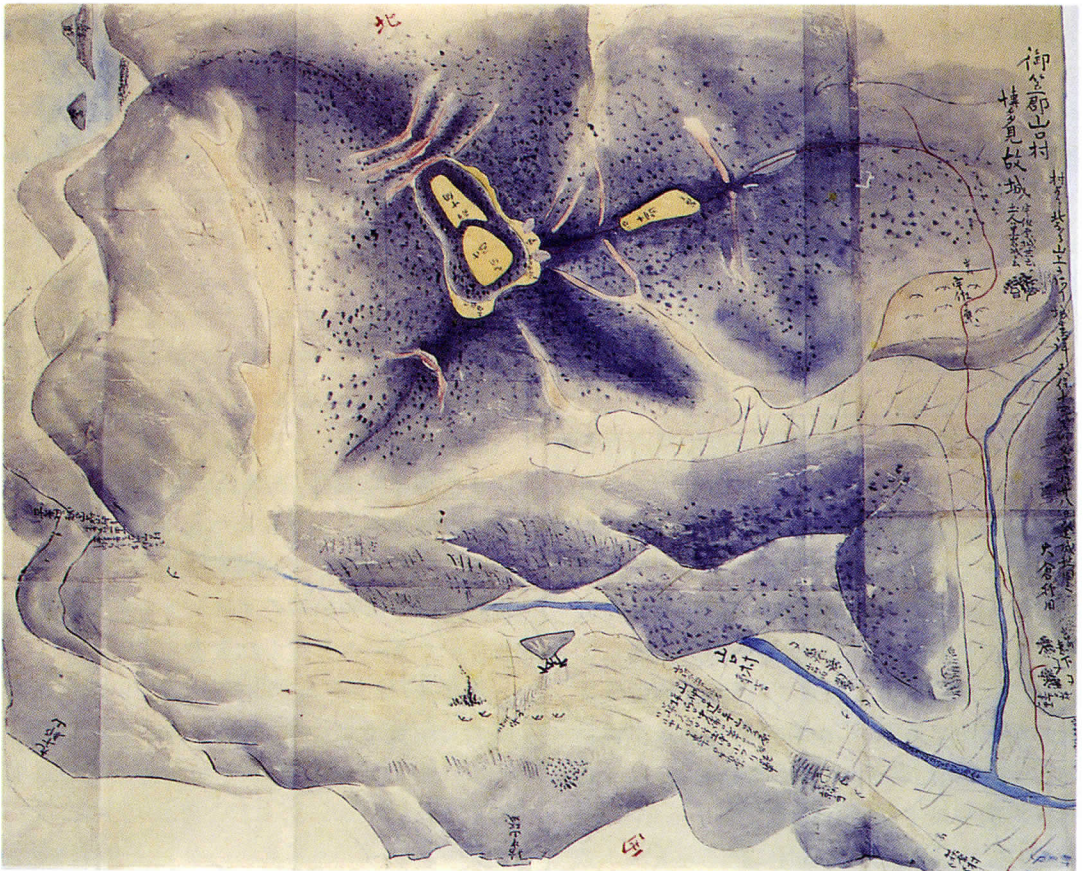
博多見城

博多見城は、山口地区字不動浦(ふどうら)にあります。城跡は、山口川の谷に面する北側の標高269mの山頂一帯に位置しています。RKB^{さつき}皐月ゴルフ場の裏手に当り、城跡を目指すにはこのゴルフ場が目印になります。

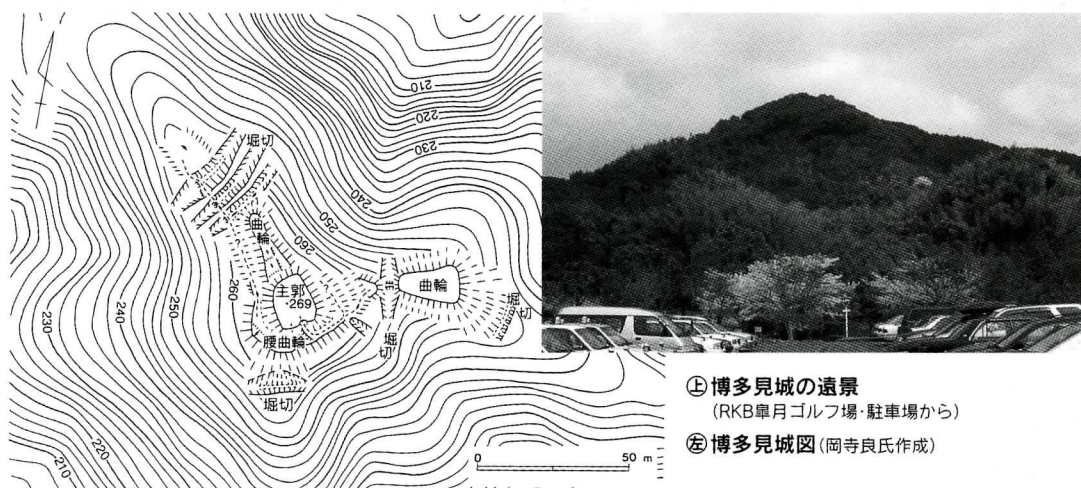
博多見城については、『筑前国続風土記』『古戦古城之図』に記載があり、『筑前国続風土記』では「山口村にあり。又うさか原の城とも云。村より北なる高さ山上にあり。城主詳ならず」と記されています。秋月藩士^{おおくらたわちか}大蔵種周作成の『古戦古城之図』では、城跡の絵図に「土人ハ黒岩城ト云」と書かれています。

これらの記述で注意されることは、城が山口村にあり、その位置は村の北の山上にあるとされていることで、城主については不明であるものの、山口村との関係が強うかがわれることです。また城の呼び名が異なっており、確固とした城名が確立していないことも注目されます。これらのことからこの城は、もともと広い領域を対象に成り立った城ではなく、おそらく直接的には山口川の谷を基礎として成立した、小規模の城であったと考えられます。

城跡は標高269mの山頂を中心によく残っており、山頂にある東西約15m、南北約20m



博多見故城の図(1843年、大倉種周測量。国立公文書館蔵)



㊦ 博多見城の遠景
(RKB草月ゴルフ場・駐車場から)
㊦ 博多見城図(岡寺良氏作成)

くわ
の曲輪(防備のための平地)を主郭とし、北西に連続する曲輪を一つ配し、その先端は三条の連続堀切で尾根を遮断しています。また、主郭の周囲は人工的に切り落とされ、特にその南側崖下には幅2m~3mの腰曲輪こしくわを巡らし、その先に一本の堀切を設けています。さらに東側の尾根には主郭との間に堀切を一本設け、その先に東西約20m、南北約10mの曲輪を配しています。

主郭を中心に、尾根の延びる北側と東側に曲輪を伸ばし、曲輪間や曲輪先端を堀切で遮断するという構造が基本と考えられます。注目されることは、発達した土塁が認められないことで、城の構造としては古い姿をとどめていると理解されます。

現在、筑紫野市には十三の中世山城の存在が明らかになっています。これらはいずれも戦国末期、太宰府を中心に争奪を繰り返した筑紫氏と高橋氏の持ち城で、平地が東西からもっとも狭まる二日市地峡を境に、西から南側の城が筑紫氏、北側の城が高橋氏に属していたことが知られています。博多見城は筑紫氏の領域内にあり、しかも筑紫氏の重臣帆足氏の本拠に近い場所に位置しているところから、築城時期や城主は明らかではありませんが、最終的には筑紫氏の城郭網に組み込まれた城

であると思われます。

小規模な城ですが、その戦略的価値はきわめて高く、山口から平等寺を抜け肥前へ通じるルートを押さえる位置を占めます。現在のこのルートは、国道3号線や県道31号線などの主要道とは異なり、あまり利用されていませんが、筑紫氏の本拠肥前きい基肆郡(現在の鳥栖市・基山町)へ抜ける最短コースであり、しかも城は基肆城の麓を通じる古代の山辺の道にも隣接しており、交通路を押さえるという戦略的性格が浮かび上がります。また博多見城の名が示すとおり、この城から博多湾が望めることも重要であり、博多方面の動向をうかがうことができます。まさしく城名の由来ともなったのではないかと思います。

また博多見城は、筑紫氏の御笠郡支配の拠点となる天判山城てんぱんざんから南へ尾根伝いに1kmほどのところがあり、その間の連絡は容易であり、最終的には天判山城の支城としての機能を負っていたものと考えられます。

現在、城跡は雑木林となっており、城へ通じる道も明瞭ではなく、訪ねる人もなく忘れられています。その名のとおり博多湾が望まれることは一驚に値すると思われます。

(石橋新次)